

高句麗壁画古墳に描かれた塵尾を執る墓主像

——魏晋南北朝期の士大夫としての描画——

門 田 誠 一

序

高句麗壁画古墳は往時の生活や習俗を今に伝える資料としてその美術的な価値とともにかけがえない歴史の資料であることは論をまたない。それゆえに構図を分析することによって、高句麗人の風俗やさらには精神の領域にまで立ち入ろうとする考察がさまざまな先学によって試みられている^①。研究の多くは複数の壁画の同一要素を集めることによつて、高句麗人の生活の一端を切り出そうとするものであったが、近年においては壁画の構図を中国の文献史料との比較で追跡しようとする、いわゆる図像学的な検討も試みられるにいたつて^②。

ところで壁画が描かれた古墳の墓としての機能にもつとも関わりが深いのは、そこに葬られた人物すなわち墓主であることもまた言うまでもなからう。高句麗の古墳壁画が墓主すなわち被葬者に対してどのような目的で描かれたかについては、生前の生活を描いたものであるとか、葬送儀礼を描いたものであるとかあるいは死後の生活に伴う人や物を描いたなどという諸説がある。ただし、高句麗人の認識していた死後の世界観や葬送観念について、文字による詳細な記述がのこされていない状況において、多元的な意味合いをもっている可能性も否定はできず、これらのどれが高句麗人の精神世界に適うものであるかはなかなか難解な問題である。しかしながら、そのいずれ

の場合においても、高句麗古墳の墓主壁画は被葬者を唯一無二の対象として描かれたものであることもまた検討の定点となることも言をまたない。

そして、このような壁画に囲まれた死後の世界の主そのものもその構図の中にしばしばみられる。本論では自らの安息の場所である古墳の壁画のなかに描かれた墓の主その人である墓主図像について、その姿勢や持ち物を抛り所として、彼らの姿のいくぶんかを復原することを試みたいと考えている。

一 高句麗壁画古墳の塵尾を執る墓主像

はじめに高句麗壁画古墳に描かれた塵尾を執る墓主像を概観しておきたい。その前に塵尾そのものの定義あるいは形態や構造的な特徴による限定をする必要がある。すなわち、塵尾と形状や材料も類似し、相似た用途が想定される羽扇などとはどのような差異があるのかという点を示し、この後の比較検討の基本としたい。

塵尾の形態や構造、材質については、いくつかの先行研究によって論じられており、その理解は、以下のような特徴としてまとめられる。すなわち、構造としては柄、挟木、挟木釘、鐔、毫の五つの部分からなり、全体としては団扇形を呈するというものである。羽扇や団扇と異なるところは、本来、塵という動物の体毛であった毫といわれる部分を二枚の木板である挟木で挟んで作られている点である。⁴⁾

先行研究を整理すると、塵尾は団扇状であるが、羽や毛などで作られた有機質部分が木質部分に挟まれており、このことより動物の毛などで作った払子とは異なり、手に支持した場合にも、全体が上方を向くものであることが知られよう。端的には、羽毛などが木質部分で挟まれて固定されていることが構造および視覚上の特色であるといえる。このような特徴のゆえに壁画に描かれても識別できる塵尾は、高句麗壁画古墳や魏晋代の壁画墓においても、

墓主の正面像ないしは、対座像を中心として塵尾が描かれる。

高句麗壁画古墳をみていくと、塵尾が描かれた古墳のなかで、もっとも時期的にさかのぼるものとして安岳三号墳（黄海南道安岳群）があげられる（図1の1）。この古墳は多様な壁画とともに「永和十三年」という墨書銘文により、三五七年に築造され、かつまた、おなじく墨書銘文によつて、中国より高句麗への亡命漢人である「冬寿（史料上は修寿）」その人であることが判明したことで学史上に名高い⁽⁵⁾。塵尾は西側室西壁の墓主像すなわち「冬寿」が手に執っている姿で表されている。

年代の明らかな壁画古墳のなかで、安岳三号墳より時期の下るものとして、徳興里古墳（平安南道南浦市）に塵尾を執る墓主図像が描かれている。この古墳は墨書銘文により、「永樂十八年」すなわち四〇八年に「移柩」された「鎮」という人物が墓主であることが判明しており、造営時期の明らかな壁画古墳として、高句麗古墳の年代の基準とされるものである。墓主である「鎮」は墨書銘文によつて、「□□郡信都県都郷中甘里」出身の亡命漢人であることが知られる。「鎮」の姿を表した墓主像は前室北壁（図1の2）と玄室北壁に右手に塵尾を執る姿で描かれている⁽⁶⁾。

台城里一号墳（北朝鮮江西郡台城里）の石室は側室の付属した前室と玄室からなる構造であり、西側室に墓主の壁画が描かれていた。墓主は座床に座り、頭部には外冠と内冠からなる被り物を被つて、右手に塵尾を執る姿を表わしている（図1の3）。全体として安岳三号墳の墓主像に類似している。前記二古墳のように築造された年紀が明らかではなく、論者によつて四世紀から五世紀始め頃までの年代が考えられている。石室構造、壁画内容ともに安岳三号墳の強い影響が指摘されており、四世紀後半から五世紀初め頃までの幅で築造年代を考えてよいと思われる。

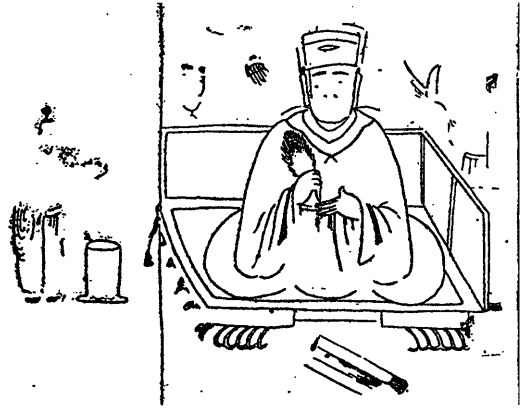
高句麗壁画古墳に描かれた墓主像のなかで、塵尾を執る姿で表されるものには、如上のような例があるが、一方



1 安岳 3号墳



2 徳興里古墳 (前室北壁)



3 台城里 1号墳

図1 高句麗壁面の塵尾を執る墓主像

では塵尾を執らない姿で描かれる墓主像も認められる。墓主が塵尾を執らない姿の場合、夫婦像として描かれることが多く、例としては、薬水里古墳(平安南道江西郡)、龕神塚(平安南道温泉郡)、雙楹塚(平安南道龍岡郡)、通溝一二号墓(馬曹塚)、角抵塚、舞踊塚(以上、吉林省集安市)などがある。年代は、論者間の違いを鑑みて、一定の幅でとらえても、四世紀代後半から五世紀半ばまでに収束すると思われる。⁽⁸⁾

二 持ち物による墓主図像の類型—魏晋代壁画墓の検討—

次に高句麗壁画古墳と時期的にも壁画の構図上も対比的に論じられる魏晋代の壁画ある墳墓の墓主図に描かれた塵尾や墓主の手の表現と対照して検討し、そのことよって、高句麗古墳壁画に描かれる塵尾の位相を明らかにしていきたい。

そこで、まず、高句麗壁画古墳と壁画内容や構図および墓室の構造からも対比的に検討される遼陽地域の魏晋代の墳墓に表現される墓主像について概観しておく。

塵尾を執る墓主の正面座像としては、上王家村晋墓が知られている。^⑨前室に続く棺室（墓室）は南北二室に分けられ、人骨や副葬品などから、被葬者は南側が男性、北側が女性であると考えられている。壁画は棺室の前柱石や南北両棺室の壁面にみられた。「墓主宴飲図」と報告されている画像は南棺室の奥壁に描かれている。その有様は堂上に朱色の幕を懸けて、その下に四隅から朱色の帷幄を垂らし、男性の墓主が方形の榻の上に正面を向いて端座した構図として表されている。墓主は頭には冠を戴き、紅色の口唇の上には髭を生やして、右手には塵尾を執っている。ただし、着衣は模糊としてはつきり分らない。墓主の前方には紅色の方案が置かれた背後には朱色の屏障が立てられ、その左右に四人の侍者が配されている。

このような墓主像や北側棺室に描かれた車騎出行図などからみて、報告文では、この墓は漢代および魏代の壁画墓と東晋代に並行する高句麗・安岳三号墳の中間的な状況を示すものであると位置づけている。^⑩とくに墓主像については表現方法や塵尾を執る点など、遼陽の壁画墓のなかでは安岳三号墳ともっとも類似するものである。

遼西地域では、朝陽・袁台子壁画墓に塵尾を執る墓主が描かれている。^⑪この墓は板石を用いた石槨墓で、前室の東側にある龕室に墓主の正面座像が描かれている。黒色の冠を被った墓主は右手に塵尾を執り、座床に座っており、

上部には帷帳が張られている様が描かれている。報告者は遺物や壁画の検討より、東晋代の四世紀初頭から中葉頃に築かれたと考えている¹²。

いっぽう、遼陽の魏晋代壁画墓のなかでは塵尾を執る墓主像以外に、三道壕第二場墓（令支令墓¹³）、三道壕第四場墓、南雪梅村一号墓¹⁵、南林子壁画墓¹⁶、棒台子二号墓¹⁷のように、墓主夫婦が並座する像が描かれている墓が数多く知られている。このような遼陽地域における壁画墓主像の構図の違いについて、東潮氏はこれを時期差とみて、墓主夫婦像から墓主正面像に移行するのは上王家村墓を境としていると考えた¹⁸。遼陽地域において、夫婦像と墓主正面像の両種の構図が截然と分期されるかどうかについては、微妙な時期を判別する資料的根拠が十分でないため、筆者はある程度並存する可能性を想定しているが、総合的な変化については東氏の見解に従いたい。

いっぽう、遼陽地域以外で営まれた魏晋代の壁画墓のなかでも塵尾を執る姿の墓主が描かれているものがある。洛陽・朱村曹魏壁画墓は磚室で、墓室の北壁に食物を載せた案の前に座る墓主夫婦が描かれていた。向かって右側の男性墓主の傍らには二人の男性侍者が配され、そのうち墓主に近い一人は二枚の板で挟んだ構造の深い紅色の塵尾を手持って侍立している。これは男性墓主が執る塵尾を侍者が奉持したことを示す構図として注目される。この墓の築造時期について、報告者は壁画の内容や出土遺物から曹魏代のものだと推断している¹⁹。

北京・八角村魏晋墓は複室構造の石槨墓で前室に設けられた石龕奥壁に壁画がみられた。男性墓主像は座床に座った正面像で、右手に獣面の装飾のある塵尾を執り、左右に侍女を配した構図によって、描かれていた。遺物や壁画の内容からみて、魏晋代のものだとされている²⁰。

河北・碌家莊磚室墓は後漢の熹平四年（一七五）の紀年銘がある複室墓であり、座床に座った正面を向く墓主像が描かれており、手には小さな旗状の器物を持っている。これは形状からみて、塵尾とは異なるが、塵尾が盛行する時期に先立つ事例と位置づけられる。別の画面には横向きの夫人像が描かれている²¹。

雲南省昭通後海子壁画墓は、直方体の石で、墓室の天井をドーム状に築いており、墓道には左右に小さな龕室が設けられていた。墓室の四壁に壁画がみられた、とくに奥壁（北壁）の下側には男性墓主の正面座造像が描かれていた。墓主像は座床に座り、左手に塵尾を執る姿の正面像であり、周囲には侍者を配している。その他、東壁には行列図や四神図が描かれている。墓室奥壁に記された墨書銘文より、墓主が霍承嗣であり、東晋の太元年間（三八六〜三九四）に造墓されたことが判明している。²²⁾

酒泉・丁家閘五号墓では前室と後室からなる複室構造の磚室墓で、壁画は前室の全面と後室の奥壁にあった。そのなかでも前室西壁には左手に塵尾を執り、座床（報告書では榻）に端座した墓主人が描かれている。報告書ではこれを墓主人が生前の寛いだ行楽や出遊の姿を表しているとみている。また、この墓の築造年代については、類似した他地域の壁画墓との対照によって、四世紀末頃から五世紀中葉頃のものともみている。墓主については西涼が酒泉に遷治した後の有力士族の高級官僚である可能性が示唆されている。また、後室の壁画には毛で房状に造られた払子と思しきものや直線的なしつらえから堅い質のもので造られたと思われる扇などが描かれており、それらは前室西壁の墓主の執る塵尾とは明瞭な違いがあることから、それらを別種のものとして描き分けていたことも知られる。西域ではトルファン・アスターナ一三号墓で座床に座り、右手に塵尾または団扇状のものをもった墓主が描かれている。造墓の年代は東晋頃のものと考えられている。²⁴⁾この墓の壁画では墓主を中心として、樹木とその下に描かれた馬、日月、農耕風景、厨房などが配されており、はるかな距離があるにもかかわらず、高句麗古墳壁画と同様の構図をとることがきわめて興味深い。

このような例からみても、塵尾を執る墓主像が描かれている壁画墓は、時期的には魏晋南北朝期を中心とし、洛陽・朱村曹魏壁画墓や北京市・八角村魏晋墓などの一部の例を除くと地域的には雲南、甘肅、遼東、高句麗など、中華世界の周辺に顕著であることが知られた。

三 文献に記された塵尾

塵尾に対する文献学的研究は、これまで字義の詮索が中心となっていた。しかしながら、高句麗古墳の壁画に描かれるのと同時代史料の列伝などには、實際生活の場面のなかで使用される塵尾の記述が認められるのであって、とくに本論ではこれらに注視し、高句麗壁画古墳の塵尾の検討につなげたいと思う。

塵尾は魏晋代において、清談の象徴とされるが、これはいわゆる竹林の七賢が図像として表現される場合に、塵尾を手執っている姿に描写されることに象徴化される。ただし、このような図像は後代の絵画表現に特徴的なものであって、南朝の竹林の七賢図として著聞する南京・西善橋南朝墓の磚画には、塵尾を執る表現はない。²⁵ しながら、魏晋南北朝期において、とくに士大夫層の間で塵尾の流行をみたことは疑いなく、史書のなかで検索してみると、『漢書』『後漢書』までは塵尾という語はみえず、記載内容の重出を含むが、『晋書』に八箇所、『宋書』に一箇所、『南齊書』に七箇所、『梁書』に二箇所、『陳書』に二箇所、『南史』に二箇所、『北齊書』に一箇所（ただし、いずれも注や校勘記の部分にみられる場合は除く）と、出現頻度の上でも魏晋南北朝期に限ってみられる語であることが知られる。

そこで、まず、魏晋南北朝期における清談や老荘思想、そしてそれによる超俗と塵尾の関係を示す器物としての塵尾について史料をひきながら、みていきたい。

晋の王衍（夷甫）は才能に恵まれ、容姿端麗で明晰なこと神の如く、常に自ら子貢に比していた。彼は哲学談論の妙手であり、老荘を談ずるのを事とし、いつも白玉の柄の塵尾を握り、手の色と区別がつかなかった。²⁶ ここではやはり専ら老荘を談ずる才に長けた王衍を際立たせる道具だとして、さらに彼の白玉の如き端麗さを示す、手と見分けのつかない白玉の塵尾として、二つの意味あいでも用いられている。

清談における麈尾の有様を具体的に示す例をあげよう。東晋代の孫盛は殷浩と相對する談論界で名を馳せていた。孫盛は殷浩のところへ行つて談論し、向かい合つて食し、麈尾を奮い、その毛が悉く飯中に落ち、食事は冷めてまた暖める事四度に及び、暮れるに及んで餐を忘れ、理竟定まらなかつた、⁽²⁷⁾ という。この情景の描写には多少の潤色を受けているとしても、当時の談論の風潮を察するに余りある。

『南齊書』では、琅邪の王僧虔の逸話をみてみよう。劉宋から南齊の人である王僧虔は、その子を戒める書のかで、自分は玄学に心をひかれ若い頃から老年に至るまで、多くを学び、数十家の註を通読したが、それでもまだ軽々しく談論しようとは思わない。ところがおまえは老子の卷頭五尺ばかりを開いただけで、王弼や何晏が何を言っているのかも知らないくせに、すぐ麈尾を振り回し、自ら談士を以つて任じている。これは甚だ危険なことである。もし、袁粲などの偉い人達から、易や老莊の言葉について質問を受けたような場合には、まだ見ておりませんなどと返事ができるものであろうか。⁽²⁸⁾ と諭した。この記述に対しては、清談本来の使命であつた脱俗求真という精神が失われて、ただ貴族の教養の高さを示す行動として定型化されて行くことの事例としてあげられている。⁽²⁹⁾

同様に麈尾が士大夫層の教養を象徴するものとして、『陳書』にみられる次の記述をあげよう。ある時、陳の後主が東宮にあり、官僚を集めて宴を設けたところ、玉柄の麈尾が出来上がつてきたので、後主は親しくこれをとつて、「当今また士多きこと林の如くといえども、これを捉るに堪える者に至つては、独り張譏あるのみ」といつて、梁代からすでに談論に名を得ていた張譏に授けた。⁽³⁰⁾ 優品である玉柄の麈尾が、これを執る人物を選ぶといふこの記述は麈尾そのものに士大夫層における教養としての清談が託されたことを象徴的に示している。この話には後日談があり、後主が鐘山の開善寺に幸した時、從臣を召して、寺の西南にある松林の下に座らせ、勅して張譏を召し、豎義（義理を説いて明らかにすること）を命じた。その時、麈尾を求めたが、届かなかつたので後主は再度、勅して松の枝を取らせ、これを張譏に手渡し、「麈尾に代えるべし」といつた。⁽³¹⁾

これらの記述から、南朝末にいたるまで形式的にせよ清談の余燼が残つたものとみられている²²。そして、士大夫の清談にはこの時期にいたつても麈尾が不可欠であつたことを示している。同様に南朝末における清談と麈尾の關係を示すものとして次のような記述がある。

『陳書』によると陳郡の袁憲は十四才の時に召されて、梁の国士正言生となつた。あるとき、国子博士の周弘正は講座に登ろうとしていたところで、弟子を集めてあつたので、袁憲を部屋に引き入れ、麈尾を授けて、樹義を命じた。同席していた謝岐と何妥とに、周弘正は命じて論難數番を試みさせたが、袁憲を屈服させることができなかった。この時、学衆は堂に満ち、観る者は重沓する有様であつたが、袁憲の態度は自若としており、弁論には余裕があつた²³という。ここでもやはり清談に臨む際に麈尾を執つている様子がみてとれる。

このような清談や老荘のような超俗の象徴としてのみならず、麈尾はそれ以前に魏晋南北朝の士大夫たることを示す必需の品として表されることが多い。次に、いくつかの史料をあげて、このことを示しておこう。

呉苞は儒学、礼書、老・荘の学を善くし、南朝・宋の泰始年中に徒弟を集めて学を講じたが、彼は黃葛巾の冠をつけ、竹で作つた麈尾をもち、二十年余りも粗末な食事を続けた。のち、隆昌元年（四九三）に南齊の武帝が、当時の彼の評判を聞いて太学博士に召しだそうとしたが、呉苞はこれを固辞した²⁴。呉苞のそのような学問に臨む清貧な姿勢を象徴するものとして竹製の麈尾が用いられているのである。竹の粗末な麈尾を清貧さの徴証としたこの逸話からは、逆にその当時、処士であつても一個の独立自尊の人間として備えるべき持ち物の一つとして麈尾が認識されていたことを知ることができよう。

同じく麈尾が士大夫層が常に携行するごく一般的な持ち物であることは、例えば高句麗壁画古墳と参照されるべき魏晋南北朝の史料中には「麈尾を挙げて口を掩いて笑う」などの表現が散見される。それは、たとえば次のような記述にみられる。太尉であつた潁川の庾亮は武昌と江州を併せ領した。庾亮は孟夏を属僚として招き、孟夏が

任地へ行つてみると、庾亮は引見して風俗の得失を問うた。孟夏が、これに答えて「役所に帰つて、官吏に問いましよう」と言つた。庾亮は麈尾を挙げて口を覆つて笑つた。弟の翼に、孟嘉は盛徳の人なり、と言つた、⁽³⁶⁾という。麈尾はこのように士大夫層の一般的な持ち物であり、持ち主の体に馴染んだ愛着深いものであつたがゆえに、埋葬に際して、棺の中に置かれることもあつた。

東晋の王濛が病篤いなかで、灯火のもとで麈尾を回しながらこれを見つめ、嘆息して言つた。「これほどの男が四十まで生きられぬとは」。彼は三九歳で卒した。劉惔（劉尹）は殯に臨んで、王濛が愛用していた犀角の柄の麈尾を棺の中に納め、長く慟哭した、⁽³⁶⁾という。この場合は、とくに生前の持ち物であるとともに、持ち主である王濛自身が亡くなる直前に麈尾を持つて、嘆息したがゆえに、棺の中に納められたのであろう。

また、麈尾は士大夫の必需品であつたがために、贈答に用いられたり、さらには皇帝から下賜されることもあつた。王浚は晋の開国の功臣である王沈の子であり、八王の乱にあつて、幽州刺史として、早くより自立の志を有した。五胡十六国の一に数えられる後趙を建国した石勒は建興二年三月に襄國の市で王浚を斬するが、それに至る過程で以下のようなやりとりがあつた。王子春らは王浚の使者とともに襄國へ帰つた。そこでは石勒が精銳兵を隠して、使者に対して、軍隊を脆弱にみせることを命じ、北面して使いを拜して、王浚に書した。王浚は石勒に麈尾を贈つたが、石勒はあえてこれを執らず、壁に掛けて朝夕、拜した。そして、石勒はこう言つた。「私は王公に見えずとも、王公が賜つた物を見るだけで、公に見えているようだ」⁽³⁷⁾。

この記事に対して、王勇氏は名族出身であり、年長の王浚が麈尾を贈ることによつて、奴隸出身で「羯胡」であり、漢族ではない石勒に新しい身分を認めたと、石勒自身はそれを身に余るものとして、執るのを慎み壁に掛けて拜んだのであろうと述べている。⁽³⁸⁾この記述では、王浚より賜つた麈尾を石勒自身が執らないことで、まず謙讓の意を示し、それを壁に掛けて拜することで、さらなる敬意と恭順を表したことが読み取れる。ここでは、本来、手に

執るべき塵尾を執らず、拝するということが、この文脈における恭敬の意味を象徴していることに注意しなければならぬ。この記事は王公、士大夫の間において、塵尾が間の贈答品や賜り物として用いられた場合の具体例として興味深い史料である。

やはり、塵尾が士大夫としての一定の格を示す逸話をあげよう。劉宋末に微賤の軍人から栄達した陳顛達は息子が貴族の師弟に習つて車馬服飾を奢麗にするのを苦々しく思い、「塵尾扇は〔晋代の〕王氏と謝氏のような名家の家物であり、おまえがこれをとつてこれに続くことをもとめてはいけない」と諭した、といふ。⁽³⁹⁾

皇帝から塵尾を下賜された例としては南斉の顧歡をあげよう。彼が官を辞して、郷里に隱遁する際に武帝は塵尾と素琴（飾りのない琴）を賜ったことが『南斉書』高逸伝に記されている。⁽⁴⁰⁾

葬送に関わる特殊な塵尾の用いられ方を示す例をあげよう。南斉の奇人とされる呉郡の張融は若い頃に道士の陸脩静から白鷺の羽で作つた塵尾を贈られた。その時に陸脩静は「これは珍しい物であるから、優れた人に奉ずるのだ」と言つた。張融は建武四年（四九七）に病で卒する際、通常は葬儀に用いる旒を用いず、葬祭を設けず、自分の死後は人をして塵尾を持たせて屋根の上に登らせ、魂を復させるように建白した。⁽⁴¹⁾張融が自らの学問の象徴として、珍奇な塵尾を重用し、葬祭に用いたというこの記述は、南朝末において、やはり塵尾が士大夫層に重んじられていた一面を示しているといえよう。魏晋南北朝期における塵尾の用いられ方を実際にみてくると、塵尾が当時の士大夫階層にとつては象徴的な道具であり、また、その生活に密接に関わつていたことが知られよう。それゆえに塵尾は天子から臣に下賜されたり、他国への贈答に用いられることがあつた。また、日常生活に密着した器物であるがために、遺骸ともに棺のなかに納められたり、死後の葬祭において用いられる場合もあつた。

このような魏晋南北朝期における塵尾のもつ属性については、すでに思想史の側面から、森三樹三郎氏の高論があり、塵尾は清談を象徴するものであるとともに、すでにふれた『南斉書』にみられた陳顛達が息子の奢麗に流れ

るのに対し、塵尾を象徴として論じた記述を引いて、塵尾が一流貴族であることを表示するための道具であったと端的に指摘している。⁽⁴⁾

要するに、塵尾は一般にいわれるように魏晋の士大夫の風度を示し、あるいは清談と密接に関わるのみならず、実際に魏晋の士大夫の生活や葬送に密着した器物であった。実際、魏晋南北朝期においては、士大夫層には欠かせない持ち物であるがうえに、上にあげた記述は、彼らの生活の節目や社会との関わりのなかで、あるいは政治上のとりわけて肝要な記載のなかに現れる場合だけが、ことさらに取り上げられているのであって、それ以外の日常平生の暮らしでは、取り立てて顧みられることもないほどに、一般的な持ち物であったと考えてよい。逆に言えば、それほどの普遍性をもつがゆえに、魏晋の墳墓壁画には描かれないことも多く、そして、高句麗をはじめとした中原を離れた地域において、ことさらに墓主の持ち物として描かれたのであろう。

四 高句麗壁画古墳墓主図の執る塵尾の意味

高句麗壁画古墳の墓主像に伴う持ち物として、しばしば描かれる塵尾のもつ意味について、前項でふれた魏晋代における塵尾の用いられ方を参考として瞥見してみたい。

まず、高句麗壁画古墳における塵尾の描写は類型的には、中国における魏晋墓のそれと同じく墓主が執る構図として表される。これは魏晋代における士大夫階層の実生活における塵尾の意味からみると当然の表現といえよう。

中国の魏晋代における墓主の表現については先に概観したが、そのなかでも、地域的に近接する遼陽地域における魏晋墓の墓主像のなかには塵尾を執る例が、ほとんど見られないことが注意される。遼陽地域では、上王家村晋墓の壁画に塵尾を執る墓主の正面座像がみられるが、それ以外の多くの壁画墓においては生活のなかでの墓主像が

描写されることが多い。また、墓主の正面像が描かれる場合も、拱手像として描かれる例の方が多い。遼陽地域の魏晋墓は、すでにふれたように墓室の構造上も高句麗壁画古墳に影響を与えたとされるにもかかわらず、塵尾を執るといふ墓主の細部表現についてはかならずしも共通しないことに注意したい。

いっぽう、塵尾を持つ墓主の正面像は、高句麗地域の他では酒泉・丁家閘五号墓、北京市・八角村魏晋墓、雲南・昭通後海子東晋墓などで発見されている。地域的には高句麗とは相当に離れた地域が多く、また、北京市・八角村魏晋墓を除くと、雲南、甘肅などの中原地域からは隔たつたいわゆる辺境地域において類例が知られることも注意してよからう。

塵尾そのものではないが、おそらく同様の器物と考えられる羽扇の実物が韓国・茶戸里一号墓、一五号墓、二四号墓、三六号墓などから出土していることは、壁画の塵尾が中原文化から遠く隔たつた地域で発見されている点と矛盾しない。このような茶戸里墳墓群出土の羽扇は、たんに中華の文化を取り入れたというよりは、『三国志』魏書韓伝に記されるように、諸韓国の有力者である臣智には邑君の印綬を与え、次位の者には邑長とし、さらに下位の下戸が楽浪郡や帯方郡に来る時も皆、衣服や被り物（幘）を仮し、自ら印綬を持ち、衣服や被り物を着けている者が千人以上もいる、⁽⁴⁾という内容を実際に現す例と考えたい。すなわち、中華世界における階層を具現する器物の一種として用いられたものが羽扇であり、塵尾であると考えられる。この点において、原三国時代における羽扇の出土は、すでに中華世界における身分表徴の意味が、この時点で朝鮮半島南部にまで展開していたことを物語るものであつて、高句麗壁画古墳における塵尾表現の史的環境に結びつくものと位置づけられる。

その後、すでにふれたように魏晋南北朝時代にいたると塵尾は清談を象徴するものであるとともに、一流貴族であることを表示するための道具となつた。⁽⁵⁾すなわち、魏晋南北朝期には、少なくとも士大夫階層には欠かせない持ち物であつたといえよう。

そして、この種の器物が高句麗壁画古墳に描かれるのも、同様な意味において、中原から離れた地域において、被葬者が自らの位置づけを示すものと考えたい。たとえば、安岳三号墳は、遼東地域からの亡命者である「冬寿」が葬られているのであり、墨書に記されている彼の官位は実職であった可能性は少ないけれども、中華世界のそれである。冬寿がこのような官職を記した意味については、高句麗に対して半独立の立場を示していたなどの見解が示されている⁽⁴⁶⁾。政治的な立脚点とは次元を異にして、亡命漢人である冬寿は、墓内に塵尾を執る自らの像を描くことによつて、士大夫としての矜持を示し、社会的にいわば中華世界に属することの自己証明を果たしたものでないかと考えるのである。このような見方は憶測に過ぎるとされるかもしれないが、安岳三号墳より約半世紀遅れて築造された徳興里古墳の被葬者である「鎮」も、塵尾を執つて描かれ、かつ墨書銘文より来歴の明らかな亡命漢人であり、元来は中華世界の人士であることが知られる。しかも、「鎮」の場合、墨書銘文には中華世界における官位のみならず、高句麗の官位も用いており、「冬寿」よりさらに高句麗への同化がみられることは、これまでの指摘のとおりであろう⁽⁴⁷⁾。

そのように高句麗世界への自己投入が進み、さらに「樹木図」に典型的なように壁画自体にも、本来的には高句麗の在地性がつよい画題が主体をなし、かつ人物や服装の表現にも高句麗の色彩が濃厚な徳興里古墳においても、「鎮」その人を描いた墓主像においては、ことさらに塵尾を執る姿として表現されていることは、対称をなすものとしてとらえられよう。つまり、安岳三号墳の墓主である「冬寿」よりもさらに高句麗社会に融合したとみられる「鎮」においても、塵尾は士大夫の象徴として描かれたのであり、このことは徳興里古墳の墨書銘文に「鎮」の出身地が後漢時代を中心とした地名によつて記されていることとも対応する意味をもつ。すなわち、この墨書地名によつて、後漢を漢人による理想的社会の典型として象徴させたとするならば、墓主像としての理想的姿態は中華世界の士大夫たる「鎮」自身に塵尾を執らしめることによつて具現したものとみることができよう。このように徳

興里古墳の墓主に関する墨書と壁画の表現は、具象化された漢人世界における士大夫たる「鎮」を表現したものに他ならないと考える。

これはさきほど見たように、塵尾を執る墓主像が中華世界の中心からは隔たつたいわゆる辺境および辺郡に多く認められることも対応していると思われる。すなわち、辺境あるいは辺郡における中華秩序への傾斜と、高句麗における亡命漢人の置かれた状況は、徳興里古墳墨書における被葬者「鎮」の出自に端的に示されているように、中華世界の理想化を含めた憧憬を自己同一性の拠り所としていることと、墓主像に塵尾を執る構図を採用した背景とは見事に一致しているといつてよい。このような思惟の背景を考えるに際しては、これまで指摘されているような五胡十六国時代における漢族の胡族観が参考となる。すなわち、胡族に対して、漢族は文化的優越感に伴う、夷狄視、およびそのような胡族による政治的劣勢に伴う屈辱感などを抱懐していたとされる。おそらく、自らの像に塵尾を執る構図を選択した亡命漢人たちは、高句麗の国や人に対して、これと同様な思いを抱いていたのではないかと思量する。

高句麗古墳壁画の墓主像が手に執る塵尾にここまでみてきたような意味を認めるならば、塵尾を執る墓主像が描かれているもう一基の台城里一号墳に対しても、同様の塵尾の意味合いを見出だせることになる。すなわち、士大夫としての墓主を表現する道具だてとしての塵尾であつて、被葬者が中華世界への自己同一性の拠り所を欲していることを意味する。すなわち、それは安岳三号墳の墓主である「冬寿」や徳興里古墳の墓主の「鎮」と同様に、台城里一号墳の被葬者も中華世界における士大夫であることを拠り所とする人物、すなわち亡命漢人であることを示すものと理解されるのである。

いっぽう、これまでに徳興里古墳の墨書銘文のなかに墓主の「鎮」が「釈迦文仏弟子」と記され、自らが仏教信仰をもつことを明瞭に示すとともに「孔子扱日」という文言があり、儒教の影響や「周公相地」という『春秋』な

どの知識があつたことが指摘されている⁵⁰。また、前室天井には「玉女持幡」「仙人持幢」「仙人持蓮」などの文字が墨書されており、仏教と道教との混交として着目されてきた⁵¹。ひるがえつて、魏晋南北朝の士大夫たる人士は儒・仏・道の三教と深く関わり、個人のなかで、三教が共存した場合が多かつたことが指摘されている⁵²。たとえば、すでに麈尾の事例でみた張融は死に臨んで「左手に孝経と老子を執らせよ。右手に小品（般若経）と法華経を執らせよ」と遺令したといひ、南朝・梁の滅んだ後、北周に移つた王褒（五一四〜五七七）は「私は幼い時より、五十歳（知命）の年に及ぶまで、既に周公旦と孔子の教えを崇び、兼ねて老子と釈迦の談に循つた⁵³」と述懐していることが例としてあげられる。

これについて、壁画と墨書に「鎮」が魏晋南北朝の士大夫である意識を含蓄するとみるならば、「鎮」その人が「釈迦文仏弟子」であり、かつ自らの造墓、埋葬に際して、「孔子が日を択す」という語は、まさしく、張融における「左手に孝経と老子」「右手に小品般若経と法華経」とに比況すべきものであらう。このようにみるならば、徳興里古墳の墓誌こそは被葬者である「鎮」の士大夫たるべき教養を表出すべく記されたものといえるのである。いっぽう、高句麗壁画古墳の墓主像のなかでも麈尾をとらない像は、薬水里古墳などに認められる。薬水里古墳の墓主像は拱手して婦人と並座する構図であることが特徴である。墓主夫婦像は、三道壕第二場墓（令支令墓）、三道壕第四場墓、棒台子一号墓、棒台子二号墓、迎水寺墓、南雪梅一号墓などの壁画のなかにもみられるに描かれる。ただし、遼陽の夫婦像は周辺に侍者が描かれており、これを墓主夫婦が拝礼を受ける構図として類型的に理解すると、薬水里古墳の墓主像は角抵塚の夫婦像とともに、同じくこの類型に入るものといえよう⁵⁴。

しかし、いっぽうで、安岳三号墳の墓主像においても、侍者が拝礼のような姿勢をとっている。このように夫婦が侍者を伴う構図から、墓主が単独で描かれるようになるのは、遼陽地域では上王家村壁画墓からとされているが、この変化には麈尾が士大夫層の象徴として認識されるようになることが一つの背景として影響したことは否めまい。

ただし、塵尾を執る墓主像が描かれた墳墓が発見されている地域は、先にもふれたように遼陽、高句麗、雲南など、中華世界の中心ではない地域に顕著であつて、この場合の実態としての意味は士大夫の構成する世界の周縁に位置する壁画墓との明瞭な差異となつて現れているように思われる。

ここまで述べてきた意味において、高句麗を含めて、魏晋南北朝に該当する中華世界の周縁地域に分布する塵尾を執る墓主像は、自らを士大夫の世界に位置づけることを強く望むことの発露であり、そのための重要な器物としてことさらに表現されたものであると位置づけられるのである。

結 語

本論では高句麗古墳壁画のなかでも、構図の中心となる墓主像に着目し、さらにこれまでほとんど取り上げられることのなかつた墓主像のみが持つ塵尾について、同時代における属性を検討した。最後に論旨を整理することによつて、結言にかえたい。まず、高句麗古墳壁画のなかで塵尾を執る墓主像が描かれている例を抽出し、これらに対して、塵尾が盛んに用いられた魏晋南北朝期の文献記載を参照して理解を図つた。その結果、塵尾が当該期にあつては、一定の教養と階層の表徴たる持物であることについて、具体例をあげて示した。そして、このような属性を有する器物を執る姿で描かれている墓主像その人が安岳三号墳や徳興里古墳のように、亡命漢人であることが分명한壁画古墳に象徴的であることから、これらの墓主が漢人のなかでも一定の階層と教養を備えた士大夫として描かれており、それは漢人社会および中華世界における自己同一性の表徴であることを論じた。以上のような考察は墓主の手にする小さな持物から導くには大きな論点であることは承知しているが、これまで古墳壁画のなかで最も着目されるべき墓主像に対して、それほど考究が重ねられたとはいえず、あえて推論を重ねた所論を開陳した。

諸般の教示を得て、さらなる論の展開を期したい。

註

(1) 高句麗壁画古墳の研究史については、全虎兌『高句麗古墳壁画の世界』ソウル大学校出版部、二〇〇四年*に詳しい。

(2) 南秀雄「高句麗壁画の地軸像」『古文化談叢』三〇、一九九三年

南秀雄「高句麗古墳壁画の図像構成―天井壁画を中心に―」『朝鮮文化研究』二、一九九五年

門田誠一「高句麗壁画古墳に描かれた仏教関連の行事について―「百戯伎楽」の意味と系譜を中心として―」『朝鮮古代研究』一、一九九九年のち『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社、二〇〇六年所収など。

(3) 平子鐸嶺「塵尾考」『増訂仏教芸術の研究』国書刊行会、一九七六年 初版は一九三七年

福井文雅「塵尾新考・儀礼的象徴の一考察」『大正大学研究紀要文学部・仏教学部』五六、一九七一年

王勇「塵尾雑考」『仏教芸術』一七五、一九八七年

王勇「塵尾興衰史―宗教思想的的研究」『汲古』一八、一九九〇年

孫機「諸葛亮的「羽扇」嗎」『文物叢談』文物出版社一九九一年*

塚田良道「塵尾について」『埴輪研究会誌』一、一九九五年

高句麗壁画古墳に描かれた塵尾を執る墓主像

黄吉軍・黄吉博「塵尾浅説―从朱村出土曹魏壁画墓塵尾図説起」『洛陽考古発掘与研究』一九九六年*

(4) 王勇「塵尾雑考」(前掲)、孫機「諸葛亮的「羽扇」嗎」(前掲)など。

(5) 岡崎敬「安岳三号墳(冬寿墓)の研究―その壁画と墓誌銘を中心として―」『史淵』九三、一九六四年

(6) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里壁画古墳』講談社、一九八六年

(7) 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学および民俗学研究所編『台城里古墳群発掘報告』(遺跡発掘調査報告五)一九五九年*

(8) ここにあげた高句麗壁画古墳の年代論については下記の文献参照。

李殿福「集安高句麗墓研究」『考古学報』一九八〇―二*

魏存成「高句麗考古」吉林大学出版社、一九九四年、七四―七頁*

緒方泉「高句麗古墳群に関する一試考(上)(下)」『古代文化』三七―一・二、一九八五年

東潮「高句麗考古学研究」吉川弘文館、一九九八年
初出は『国立歴史民俗博物館研究報告』四七、一九九三年

(9) 李慶発「遼陽上王家村晋代壁画墓清理簡報」『文物』

- 一九五九一七*
- (10) 李慶堉「遼陽上王家村晉代壁画墓清理簡報」(前掲)
- (11) 遼寧省博物館文物隊ほか「朝陽袁台子東晉壁画墓」
『文物』一九八四一六*
- (12) 遼寧省博物館文物隊ほか「朝陽袁台子東晉壁画墓」
(前掲)
- 劉中澄「關於朝陽袁台子東晉壁画墓的初步研究」『遼
海文物學刊』一九八七一*
- (13) 王增新「遼陽三道壕發現的晉代墓葬」『文物參考資料』
一九五五一*
- (14) 李文信「遼陽發現的三座壁画古墓」『文物參考資料』
一九五五一*
- (15) 王增新「遼寧遼陽南雪梅村壁画墓及石墓」『考古』
一九六〇一*
- (16) 原田淑人「遼陽南林子的壁画古墳」『國華』五三一四、
一九四三年
- (17) 王增新「遼陽市棒台子二号壁画墓」『考古』一九六〇
一*
- (18) 東潮「遼東と高句麗壁画―墓主凶像の系譜―」『朝鮮
學報』一四九、一九九三年のち同氏「高句麗考古學研
究」(前掲)所収。
- (19) 黃吉軍・黃吉博「塵尾淺説―从朱村出土曹魏壁画墓塵
尾圖說起」(前掲)
- (20) 石景山区文物管理所「北京市八角村魏晉墓」『文物』二
〇〇一四*
- (21) 河北省文物研究所編『安平東漢壁画墓』一九九〇年*
- (22) 雲南省文物工作隊「雲南省昭通后海子東晉壁画墓清理
簡報」『文物』一九六三一一*
- (23) 甘肅省文物考古研究所編「酒泉十六国壁画墓」文物出
版社 一九八九年*
- (24) 周學軍・宋偉民編「新疆謂吾爾自治區絲路考古珍品」
上海訳文出版社 一九九八年*
- (25) 南京博物院ほか「南京西善橋南朝墓及磚刻壁画」『文
物』一九六〇一八・九*
- (26) 『晋書』卷四三・列伝第一三
(王) 衍既有盛才美貌、明悟若神、常自比子貢。兼声名
藉甚、傾動当世。妙善玄言、唯談老莊為事。每捉玉柄麈
尾、与手同色。
- 『世說新語』容止篇
王夷甫容貌整麗、妙於談玄、恒捉白玉柄麈尾、与手都
無分別。
- (27) 『晋書』卷八二・列伝第五二・孫盛
盛嘗詣浩談論、对食、奮麈尾、毛悉落飯中、食冷而
復暖者數四、至暮忘餐、理竟不定。
- 『世說新語』文學篇
孫安国往殷中軍許共論、往反精苦、客主無間、左右進
食、冷而復煙者數四、彼我奮擲麈尾、悉脱落、滿餐飯中、
賓主遂至莫忘食。
- (28) 『南齊書』卷三三・列伝第一四・王僧虔/子叔
僧虔宋世嘗有書誡子曰、：(中略)：吾未信汝、非徒
然也。往年有意於史、取三國史聚置床頭、百日許、復徒
業就玄、自当小差於史、猶未近彷彿。曼倩有云、談何容

易。見諸玄、志為之逸、腸為之抽、專一書、転誦數十家注、自少至老、手不釈卷、尚未敢輕言。汝開老子卷頭五尺許、未知輔嗣何所道、平叔何所說、馬・鄭何所異、指例何所明、而便盛於麈尾、自呼談士、此最險事。設令袁令命汝言易、謝中書挑汝言莊、張吳興叩汝老、端可復言未嘗看邪。

- (29) 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』同朋舎 一九八六年 四八〜九頁

- (30) 『陳書』卷三三・列伝第二七・儒林／張譏

後主在東宮、集官僚置宴、時造玉柄麈尾新成、後主親執之、曰「当今雖復多士如林、至於堪捉此者、独張譏耳。即手授譏。」

- (31) 『陳書』卷三三・列伝第二七・儒林／張譏

後主嘗幸鐘山開善寺召從臣座於寺西南松林下、勅召譏暨義。時索麈尾未至、後主勅取松枝、手以屬譏、曰「可代麈尾。」

- (32) 森三樹三郎『第一章 六朝士大夫の性格とその歴史的環境』『六朝士大夫の精神』同朋舎、一九八六年とくに 四八〜九頁

- (33) 『陳書』卷二四・列伝第一八・袁憲
：憲時年十四、被召為国子正言生。：会弘正將登講座、弟子畢集、乃延憲入室、授之麈尾、令憲樹義。時謝岐、何妥在座、弘正謂曰、「二賢雖窮奥蹟、得無憚此後生耶。何謝於是通起義端、深極理致、憲与往復數番、酬对閑敏。：時学衆满堂、觀者重沓、而憲神色自若、弁論有余。」

- (34) 『南齊書』卷五四・列伝第三五・高逸・吳苞の条

吳苞字天蓋、僕陽郿城人也。儒学、善三礼及老、莊。宋泰始中、過江聚徒教学。冠黄葛巾、竹麈尾、蔬食二十余年。隆昌元年、詔曰、「処士濮陽吳苞、栖志穹谷、秉操貞固、沈情味古、白首弥广。徵太学博士、不就。」

- (35) 『晋書』卷九八・列伝第六八・孟嘉

孟嘉字万年、江夏郿人、吳司空宗曾孫也。嘉少知名、太尉庾亮領江州、辟部廬陵從事。嘉還都、亮引問風俗得失、对曰、「還伝当問吏。亮举麈尾掩口而笑、謂弟翼曰、「孟嘉故是盛德人。」

- (36) 『晋書』卷九三・列伝第六三・外戚・王濛

疾漸篤、於燈下転麈尾視之、歎曰、「如此人曾不得四十也。年三十九卒。臨殯、劉惔以犀杷麈尾置棺中、因慟絶久之。」

- 『世説新語』傷逝篇

- (37) 『晋書』卷一〇四・石勒 上
王長史病篤、寢臥燈下、転麈尾視之、歎曰、「如此人曾不得四十、劉尹臨殯、以犀杷麈尾著柩中、因慟絶。」

- (38) 『南齊書』卷二六・列伝第七・陳顯達
顯達謙厚有智計、自以人微位重、每遷官、常有愧懼之色。有子十余人、誠之曰、「：顯達謂其子曰、「麈尾扇是王謝家物、汝不須捉此自逐。」

- (39) 『南齊書』卷二六・列伝第七・陳顯達

顯達謙厚有智計、自以人微位重、每遷官、常有愧懼之色。有子十余人、誠之曰、「：顯達謂其子曰、「麈尾扇是王謝家物、汝不須捉此自逐。」

- (40) 『南齊書』卷五四・高逸・顧歡

歎東婦、上賜麈尾、素琴。

(41) 『南齊書』卷四一・列伝第二二・張融

融年弱冠、道士陸脩靜以白鷺羽麈尾扇遺融、曰「此既異物、以奉異人」。……建武四年、病卒。年五十四。遺

令建白旌無旒、不設祭、令人捉麈尾登屋復魂。

(42) 森三樹三郎「第一章 六朝士大夫の性格とその歴史的環境」、『六朝士大夫の精神』(前掲)

(43) 李健茂「茶戸里遺跡出土扇柄について」、『考古学誌』一〇、一九九九年*

(44) 『三國志』卷三〇・魏書・烏丸鮮卑東夷伝第三〇

諸韓國臣智加賜邑君印綬、其次邑長。其俗好衣幘、下戸詣郡朝謁、皆仮衣幘、自服印綬衣幘千有余人。

(45) 森三樹三郎「第一章 六朝士大夫の性格とその歴史的環境」、『六朝士大夫の精神』(前掲)

(46) 岡崎敬「安岳三号墳(冬寿墓)の研究―その壁画と墓誌銘を中心として―」(前掲)

(47) 李成市「東アジアの諸国と人口移動」田村晃一ほか編『アジアからみた古代日本』新版古代の日本第二巻、角川書店、一九九二年

門田誠一「南北世界の形成」西谷正編『対外交渉』考古学による日本歴史一〇、雄山閣、一九九七年のち、古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社、二〇〇六年所収

(48) 武田幸男「徳興里壁画古墳被葬者の出自と経歴」(前掲)

(49) 川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年、二九〇三三頁

(50) 川崎晃「高句麗好太王碑と中国古典」黛弘道編『古代国家の歴史と伝承』吉川弘文館、一九九二年

(51) 上田正昭「道教とその文化の流传」、『古代国家と東アジア』上田正昭著作集第二巻、一九九八年、初出は『日本人と日本文化の形成』朝倉書店、一九九三年など。

(52) 吉川忠夫「六朝士大夫の精神生活」、『岩波講座世界歴史5』東アジア世界の形成、岩波書店、一九七〇年

(53) 『南齊書』卷四一・列伝第二二・張融
：左手執孝經・老子、右手執小品法華經：

(54) 『梁書』卷四一・列伝第三五・王規／子褒
吾始乎幼学、及于知命 既崇周・孔之教、兼循老・釈之談。

(55) 全虎兌「高句麗古墳壁画研究」(前掲)五三〇九頁
(末尾に*をつけた文献は外国文)

図出典―『朝鮮遺跡遺物図鑑』2「高句麗編」高麗電子出版社版(編著者表記なし)

付記

本論は文部科学省科学研究費基盤研究(C)「中国壁画墓との図像学的比較による高句麗古墳壁画の研究」(平成十六年〇十九年度)による研究成果の一部である。